

海洋性リゾートのデザイン序説

酒 匂 敏 次

私はたちあがって、セルマと並び、窓の外を眺めた。高台にたっているその建物の窓からは、海と、海岸ぞいに広がるオスロの市街とが、よく見えた。霧のような雨のなかに、赤褐色の市庁舎の建物が、くっきりと鮮かにたっていた。海は灰色にかすみ、水平線のあたりは、雲と、空と、海とが一体となってみえた。港には、一隻の漁船が揺れながら走っていた。

「この風景には、どこか人を落ちつかなくさせるようなものがありますね」

と、私は云った。

「どうして？」

と、セルマがきいた。私は答えた。

「どうしてだか、うまく云えません。だけど、ぼくら日本人が、その中で生きている自然という存在とは、どこかがうような気がするんです。つまり — 」

私は言葉を探して沈黙し、また外の風景を眺めた。

「ぼくらの自然は、人間と共にあるけど、この国の風景は外にある。そんな感じがするんです」

「ああ」

セルマは小さな声をあげてうなずいた。「オリエも同じことを云ってたわ。この土地の風景は自分を拒絶するって」

私たちは黙って窓の外に広がる海と街を眺めていた。

—— 五木寛之、ヴァイキングの祭 ——

海洋レクリエーションというと、私達はまず何を思いうかべるだろうか？ 夏、海岸、海水浴、そう、あの海岸にたちならんだよしず張りの「海の家」。上衣をぬいで、ござに、ごろりと横になる。海からの潮風。おばさんが、おしぼりとコーラの盆を持ってあらわれる。「そうだな、僕はビールがいいな。コーラの代りに、ビールの栓一本抜いてきてよ」「水に入る前にアルコールが入ると、心臓によくありませんよ」「なあに、水に入るのなんてどうでもいいんだよ、おばさん、潮風に吹かれてビールで乾杯する。それが最高の海水浴じゃないですか」

やがて、土曜波のつづく日が多くなり二百十日がやってくると、浜を埋めつくすようにして建ちならんでいた海の家は、いつのまにか姿を消して、海岸には、嘘のような静寂がもどってくる。平和でひなびた漁村、漁師たちの干す漁網だけが、人間とのかかわりを告げる。

これが、われわれの見馴れてきた夏の風物詩としての海洋レクリエーションであった。そんな風景に、変化が訪れようとしている。

変化は、いろいろな原因にもとづいている。新しいリゾートをデザインし、その一環としての、臨海施設を計画しようとするものは、その原因について理解しなければなるまい。と同時に、日本人の伝統的生活様式や、風土的特徴に、それらがどのようにかかわり合っているかについての巾広い認識を要求される。技術的な合理性や経済性にもまして、デザイナーの個性と、深い思想性が要求されるのが、これからの臨海性レクリエーション施設コムプレックスのプランニングの特徴といえるだろう。

Q：海洋性レクリエーションの種類にはどんなものがありますか？

A：まず、主な空間の別から分類すると、海岸、汀線の近傍を主にするもの、海面を主とするもの

それから、海中を主にするものに分けられるでしょう。活動の形式から分類すると、休息型、観賞型、遊技型、スポーツ型、探検型というように、いろいろなエネルギー・レベルのものがあることがわかります。その他、海岸の地型的特色、海洋の物理的特性、参加者の組織性、投下資本の型態等々によっても、いろいろな分類ができるでしょう。

Q：ずいぶん多様なものですね。これから、どんな種類のものが、いちばんポピュラーになるのでしょうか？

A：よく云われるように、見るレジャーからするレジャーへという傾向、これは、海洋レジャーにおいても例外ではないでしょう。最初にあげた5つのタイプについて云えば、ファースト・スリーからラスト・ツウーに、ますます重点が移っていくでしょう。とくに、最後の探検型となると、高度に知的な活動ということで、いわゆるリクリエーションというよりも、それ自体、ひとつの完結した目的をもつ、自由時間活動ということで、やがては、もつとも主要なタイプになるかも知れません。もつとも、そのためには、たとえば、リスクといったようなことについての社会的通念が、大きく変化するということが前提になるかも知れません。

Q：探検という言葉には、たしかにロマンが感じられますね。それが、海という残された最大のフロンティアに結びつく、そして現代の工業化社会というか、管理された社会というか、そういった環境の日常性からの脱却を求めている人々を誘惑するという、大いにあり得そうな気がします。海洋研究所なども、そういった活動の基地になり得るわけですね。これが、大きなリゾート計画のなかに組みこまれているとしても、不思議ではないわけですね。

ところで、一般的にいつて、海洋リクリエーション基地の施設というものには、どんなものがあるのでしょうか？

A：活動が多様なだけに、施設にもいろいろあるわけです。本当に、コンプレヘンシブなリゾートコンプレックスとは、まさに都市そのものですし、逆に、魅力ある波さえあれば、人工の施設がなにもなくても、サーフィング・リゾートとして、世界第一級の地位を確保することもできます。ところで極端な話は別として、一般には、海洋性リゾートの目玉になるのは、ビーチとポートだと云えましょう。そして、特に、このうち、ポートが、中心的位置を占めているものをマリーナとよぶことは、ご存知のことと思います。マリーナの一部に、ビーチがあるものもあれば、人工的に造成したビーチのごく一部を、マリーナということで、特にポート機能を集中させている場合もあるということで、各種各様ですが、そのどちらとも欠けている海洋性リゾートというのは、きわめて限られた海洋性の活動としか結びつかないという意味で、むしろ特殊なものと考えerべきでしょう。ビーチにしてもポート（マリーナ）にしても、これが、人間の陸から海へ、海から陸へのトランスファーのメディアムになっているということに特徴があるのであって、その故にこそ、施設の目玉になるものであるという云い方がでてくるわけです。もちろん、たとえば、投資金額の大きさとか、アトラクションとしての知名度とかいう点からは、他の施設、たとえば、水族館であるとか、展望塔であるとか、マリーナホテルであるとかいうものの方が、より重要な位置を占めているというようなことは、よくあるわけだけれど、それでも、ビーチか、マリーナ、その両方、あるいは、片方を欠いては、海洋性リゾートとしては、きわめて不完全なものと云えると思います。

Q：と同時に、ビーチや、ポートだけで、他になにもないということでも、リゾートとしては魅力がないかも知れませんね。

A：たしかにその通りでしょう。かといって、ビーチやポートの周辺装置が、人工の営造物でなければならないということでもなく、また、すべての周辺装置が、ある一定の物理的空間におさ

まっていなくてははいけないと云うこともないのですが。しかし、現在の計画の考え方の一つの主要な傾向は、核と周辺装置を含めたワンセットを、マスター・プランのもとに総合的に作りあげるといふいかにたです。その結果、できあがったものが、いわゆるマリーナ・コンプレックス、マリーナ・シティ、海洋性リゾート・コミュニティとよばれるものになる。このような行き方をとるには、充分な理由があるわけで、その最大のものは、資源の最適・最大限利用ということであり、利用する側からの、自由時間の最適効率化ということでしょう。つまり基地を提供するサイドと、それを受け取るサイドとの、両者を含めたトータル・システムの最適化という要請が、このようなワンセットの開発につながっているわけです。特に、日本のように、海岸線の延長という点では、比較的恵まれているものの、相対的にみて、その背後地について、資源的制約があり、また、前面の海面についても、漁業権その他の制約がある場合には、資源の最適利用ということは、どうしても考えなくてははいけないことである。そういう点で、最近、海洋リゾートの開発についても、特に、規模の大きなものについては、このようなマスタープラン的に行き方が採用されていることは、その背後にある動機は別として、一つの進歩であるというように評価しています。

Q：しかし、一方では、このような開発に反対する人々も多いのではありませんか？ たとえば、この前雑誌の投書欄に、「われわれが欲しいのは、豪華なホテル、レストラン、その他いろいろの付属施設があるマリーナではない。海岸のはしにスロープがあり、小さなクラブハウスがあれば、それで結構。今の民間マリーナのやり方では、“貧乏人は麦飯を食え”ならぬ“貧乏人はヨットやボートをするな”になってしまいそうだ」というのがありましたか？

A：ええ、反対は、そういったスポーツ愛好者からばかりでなく、たとえば、漁業関係者や環境保護団体の関係者からもあがっている。あなたのあげた例についてだけいえば、総合的なリゾートの開発は、資源のポテンシャルを最大限に利用していくということですから、基本的には、すべての市民により多くの配分となって返ってくるはずで、むしろ、虫食いの、小さなスロープや、船つき場をつくる方が、たいへん浪費的な、その意味では、ぜいたくな行き方ということになるのではないかと思います。

ところで、それとは別に、デザインのプリンシプルというか、思想というか、そういったものに關係することで、資源の最適利用というような発想だけではカバーできない領域があるということを指摘しておきたいと思います。プロジェクトのもつ、エモーショナル・インパクトというか、情緒的な安定、伝統的生活との連続性といったもの、あるいは、その逆説的な対比としての非連続性、新奇性といったもの、これらを評価して、プロジェクトのなかにとりこんでいけるようになると、そこにもう一つの進歩がでてくることになるのですが、もう日本の社会は、それを要求する段階にまで来ているようですが、問題は、それを受けてたつエンジニア、プランナーの側に、それだけの準備があるかということですね。大いに勉強して、発想の転換をはかり、鋭い感覚をみがいてもらいたいと思います。

Q：どうも、ながらく討議に参加していただき、ありがとうございました。

マリーナとリゾート・コンプレックスのデザインには、はっきりとした個性が主張されることは大切である。どこにいても画一的な公団アパートのような基地が、国中にネットワークのように建設されたとしたら、もちろん最初のうちは、施設そのものが絶対的に不足しているうちは、市民は、結構満足しているかも知れない。だが、やがて、工業化社会を脱出してやってきた海辺に、移植されたもう一つの工業化社会を見出だして、いらだちの感情を鎮めることができないような日がやってこ

ないとはいえない。いや、案外、近い将来に……。

写真（ここには入っていない）を見るとまずこのマリーンが現代のものではなく、何世紀か前の古い漁村のイメージ、しかも南フランスはプロバンス地方のそれを想起するだろう。しかし、これはまさしく現代人の熱望によって現代に造られた最も新しいマリーン開発なのである。……ポート・グリモーはカプセルを超えたレジャー計画である。……遠い海から帰った人間に、船をあがればすぐ安らぎがあるという安心感……つらなる家は一つとして同じ型のものがない。窓が異なる。色が異なる……一つ一つのハウスがもつテクスチャーは、古いプロバンス様式であろうとも、モビリティにおけるアクセスの問題は、最も今日的に計画され、解決されている。……あやまちは、自らのもっている風土や歴史的価値をないがしろにすることに無関心なことだ……。

浜野安宏 ポート・グリモー

デザインには、思想と共に技術が必要である（そして更に、評価が重要であるということを私はつけ加えておきたい）。海洋性リゾートのデザインにも、いろいろの技術が関係してくるわけで、特に核となるビーチやマリーナに限ってみても、建築、機械、土木、都市計画、造園などの技術を創造的に組み合わせて応用していくことが必要となるわけである。以下には、水工学に特に関係のあることにしぼって、概要を記してみる。

プレリミナリー・プランニング：可能性をさぐる。大きな柱は、資源と市場の二つである。資源の調査は、特に、水工学の分野に関係が深いもので、気象、海象、水質、土質などが、資源の大きさと性格をさめる重要な因子となる。海岸線のモーフロジー、陸域の植生、そして、それらを総合したところの景観特性、これが前者をしのぐ重要な因子であることはいうまでもない。さらに海岸線をはなれて、海中の景観、生物資源、海面スペースの性格（クルージング、ドリフティングなどから判断しての）なども、見逃すことのできない因子である。

市場の方は主として近接地域の人口、旅行者、観光客のプロファイル、更に、移住のポテンシャルそれらを支配するところの経済的、政治的、文化的性格が含まれる。利用圏内人口の所得水準、生活パターンなどが、具体的には、市場の性格や大きさを規定してくることになる。

以上2つの柱の他に、保護、あるいは保護のポテンシャルとでもよぶものを、もう一つの柱としてつけ加える人もいる。開発によって、自然的、人文的に失われるものが、どのようなものであり、どのように、たとえば、水質の汚染とか、地域コミュニティの解体とかに耐えていく、あるいは、そのインパクトを吸収していくことができるかということが、このポテンシャルの目安となるものである。資源ポテンシャルと、市場ポテンシャルを制約する第二次的な量としてとらえるよりも、最初から、前二者と並ぶ、基本的な量として、調査したり、評価したりすることが、適切であると考えられる機会が、今後ますます増えていきそうな気配にあることは否定できない。

基本計画：具体的な最適操作、手段を考える。プレリミナリー・プランニングの基礎の上に、ではどうしたら現存するポテンシャルを具体化するかを考えるのがこの段階での仕事である。開発主体の構造、資金計画、ゾーニング・プランの採用、プランの核になる地点の撰定、マスター・プランの策定などが、この作業のなかに含まれる。これらのプロセスは、ケース・ケースで異なるために、一般的な図式を提出することはむづかしい。資源の経済的、法律的な調査や評価、物理的要因の調査とそれに伴う事業費の大まかな算定などが、資金計画や、マスター・プラン作成に影響を与えるであろうし逆に、後者が、前者の利用店や、必要店を制約することもあり得ることである。

ゾーニングとそれに伴う施設：リゾート地域のゾーニングについては、これから、次第に整備されてくるであろうし、それによって、全国的な規準みたいなものも作られてくるであろう。開発主体が何れになるかによって、ゾーニングに関連する規制の効力その他も影響をうけるわけである。ここでは、そういった個々のケースや、詳細にわたる議論はさけて、考え方を整理する意味で、リゾートの区域わけを試みる。

たとえば、セミパブリックな開発主体を想定した場合には、施設建設の主な担当者をだれにするかということから

パブリック・ゾーン

プライベート・ゾーン

にわけると。前者には、リクリエーション・センター、臨海公園、海中公園、公園管理事務所、パブリック・ビーチ、パブリック・スイミング・プール、パブリック・マリーナ、とそれらの付属施設としての駐車場、休憩施設など、プライベート・ゾーンには、有料ビーチ、プライベート・マリーナ、ホテル、別荘地、ショッピング・センター、ボウリング・センター、遊園地などが設けられる。また、パブリック的な意味で計画されるが、実際は、それぞれ特定の管理者に運営をまかせるものとしては水族館、臨海学校、体育練習施設、海洋研究所、養魚センター、リゾート内部交通施設などがあげられる。その他、クラブ・ハウス、レストラン、オートキャンプ場なども全体に共通する施設として、ある時は、ホテルや、別荘地の一角に、あるいは、ショッピングセンターや、体育練習施設の内部に計画されるものである。特殊な施設としては、海中展望塔、海中ビレッジ、フローティング・ステージ、ダイビング・プラットフォームなど、汀線より海側に建設されるものも、パブリック、プライベートの両者に共通するものであろう。

上記のような分け方にたいして、施設の機能を主として、区域分けすると、

宿泊ゾーン	ホテル、モーター、貸別荘、クラブの寮など
レジデンシャルゾーン	別荘地、トレラー・パークなど
コミュニティ・ゾーン	レクリエーション・センター、コミュニティ・ハウス、公共サービスセンターなど
コマーシャルゾーン	ショッピングセンター、マリーナ・ショップなど
ハーバーゾーン	泊地、繋船スリップ、ピア、航路、防波堤、ボート置場、給油給水施設など
ビーチ・ゾーン	海水浴施設、安全監視施設、シャワー、プール、保管及びレンタル施設
文化ゾーン	水族館、博物館、海洋研究所など
スポーツゾーン	テニスコート、競泳施設、ゴルフ場など
遊技ゾーン	公園、ピクニック・グラウンド、遊園地、ボウリング場など

ファンクショナル・デザイン：上記のいろいろな施設の個々のデザインや組み立て、稼働等は、それぞれの専門家の手にゆだねられるわけであるが、特に、水工学関係の技術者が直接関与する機会の多いのは、ビーチ・ゾーンとポート・ハーバーの造成・建設に関連したことがらであろう。

ビーチには、いわゆる海水浴の基地として使われるところの他、海浜公園の海側のバウンダリー兼バファーとして、海辺のピクニック場として、ラバーズレーンのような散策の場として、オートレースやサーフィングのようなスポーツ活動のフィールドとしてなど、いろいろの用途がある。海水浴の

基地として、または、ホテル等の海側前面に、日光浴の場として、ビーチを確保しようという場合には、かなりの巾の、裸足でふんでも快適な砂地と、あまり危険のない、清潔な感じの、それでいて若干の波は侵入してくるような水面とが必要である。このようなビーチが、適当な所に存在していればこれを将来の破壊から護るよう、沿岸構造物を規制することが望ましいし、もし、満足すべきものがない場合には、人工養砂によって、現存ビーチの改良をはかるか、または、まったく新たにビーチを造成してやる必要がある。

新しく人工海浜を造成する場合、および既存の海浜を維持する場合の両者ともに、海岸の組成や、歴史、営力などについて調査をしておくことが、長期的に意味のある計画を樹てる上では重要である。個々の問題については、波浪なり、漂砂なりについての講義のなかに、くわしく取りあげられているので、ここでは、あらためてふれる必要はないが、補給された砂浜材料が、現地に存在するものと異なる場合には、漂砂の性格も異ってくるかもしれないことは、当然予想されることで、その意味では、供給源の候補地を含めた調査が行われることが望ましい。

海浜材料を、現地に輸送配分する方法としては、

直接海浜に盛砂する方法（直接置砂法）

ポンプなどにより供給地と海岸をパイプで結び連続的に供給する方法（連続補給法）

海岸の沖合に投入して、波などにより海岸に供給する方法（海中投砂法）

海岸の数ヶ所に大量の砂を貯え、自然の力で、海岸に供給する方法（ストックパイル法）

等がある。

連続補給法が各地で試みられているフロリダ、海中投砂法が採用されたニュージャージーなどの例があるが、供給源が陸上にあったり、碎石より人工的に海浜材料を製造して、新規に海岸を造成する場合などには、直接置砂法によるのが、コントロールがしやすく、不確定要因が少いという点で、すぐれているといえよう。

人工的に造成された海浜、あるいは自然海浜があっても、充分に保護することによって、季節的に汀線が大きく変動したり、侵食が行われることを防ぎ、かつ、安全な海水浴水面を確保しようとする場合には、これに、突堤や離岸堤を組み合わせるというのも一つの方法である。いわゆるポケット・ビーチの造成は、こういった海岸工学的な要求を満たすだけでなく、海岸をコンパートメントライズすることによって、一種の室内感といったものをつくりだし、これによって、周囲の無限の荒涼感とのコントラストがかもしだす快適性の効果をねらうことができる。離岸堤は、海岸から沖合の水平線を望む際の景観的效果をも考慮してデザインしなければならないという点で、形状や、天端高の決定にあたって、工夫が必要となる。

ボート・ハーバーはマリーナとして最近是一般にもよく知られるようになった複合区域のウォーターフロント部分をさしている。船の大きさや、背後地の施設、ワンユニットの大きさ等から云えば、一般的には、従来の、わが国の漁港と、そう大してちがいはなく、したがって、漁港の設計に用いられてきた諸原則は、プレジャーボート・ハーバーのデザインにも、そのままあてはまるとみてもよいし、現に、多くの現存漁港は、そのまま、マリーナに転用することが可能である。

あえて、もしマリーナを特色づけるいくつかのフィチュアをあげれば、

1. 位置 クルージング、レーシング、ドリフティング、トレーニング、スポーツフィッシング等々マリーナ利用者の目的が主としてどこにあるかによって、これらの目的とする資源へのアクセスに便なる地点に指向することはいうまでもない。時として、リゾート・コンプレックスが、このボート・ハーバーの位置に誘引されることもあれば、逆に、ボート・ハーバーが、リゾー

トの立地区域内に安住の地を求める場合もある。今後は、リゾートの核としてマリーナが、最初から、マスタープランに含まれる場合が多くなるであろうから、その位置の決定も、ハーバーとしての要求と、リゾートとしての要求の最適一致点に指向する機会が多いであろう。ただし、ボート・ハーバーそのものは現在でも、リゾートとはまったく無縁の、都市内運河沿いの敷地などに多数建設されており（ハーバーというよりは、揚艇施設というべきか）、一般にマリーナとよばれているもののうちのかんりの部分をしめている。

2. ハーバーレイアウト、泊地、航路、外廓施設などのレイアウトにおいては、たとえば、ヨットなどが多数を占める場合には、主要な風向などを考慮することが大切である。港口の位置、向き、港口へのアクセスチャネル等が、セイルボート利用のもっとも多い時季の、比較的強い風が卓越して吹く方向を考えて決定されなければならない。
3. 港内静穏度、プレジャーボートが小型であるにもかかわらず、比較的高価で、かつファッション性が要求され、外観等の維持も無視できないファクターであるため、港内の静穏度は、高ければ高いほど望ましいといつてよい。特に、一般の港湾での設計にあたってはあまり考慮の対象にされない周期の短い波や、港内反射波等についても、慎重な検討、対策の立案がのぞましい。
4. 外かく施設、防波堤などの設計にあたっては、景観上の配慮も必要で、一般に、あまり天端が高くなることは、視界をさえぎったり、またレイアウトに関連して述べたように、風を乱すことになって好ましくないことが多い。天端が低くても充分な消波能力をもつ型式の防波堤が望まれることが多くなるであろう。
5. 岸壁施設、陸上格納またはトレーラー索引のボートを水面に揚げおろしする施設が必要で、その能率如何が、マリーナの収容能力を決定する場合もあるので、その位置、キャパシティ、バックアップシステムの要不要についてよく検討しておくことが大切。ボートの性質として、夏季の日曜日午前中などに、利用がピークに達することなど、利用者の交通の便などとも関連して、できるだけ現実的な推定をする努力が必要である。
6. ボート格納施設 露地保管の他、場合によってはエレベーターを備えた高層格納施設が必要となることも多い。
7. ピアー ボートの水面保管あるいは帆走前のギ装のためのピアー、船台等には、ポンツーン・タイプのものが多く、そのレイアウトや付属施設の整備状況如何が、マリーナの使いやすさをきめる上で重要な場合がすくなくない。ポンツーンの材料としても、アルミニウム、ポリスチレン、FRP など各種のものが開発販売されている。レイアウトとしては、シングル・ボートスリップ、ダブル・ボート・スリップ、パワーボートとセイルボートの分離繫留方式などがある。計画にあたっては、ボートの種類やサイズが将来変化した場合のフレキシビリティを、どの程度まで、どのようなかたちで確保するかということであろう。わが国のデータは手に入っていないが、アメリカの例では、ボーティングの初期（該当地域に、はじめてマリーナができたときなど）の段階では、小型艇（15～19フィート）から中型艇（22フィート～27フィート）へのシフトは、かなり急激におこるようであり、この辺の事情は、わが国でも考慮に入れておく価値はあるだろう。

以上、主として、ハーバー部分について、一般の漁港等とは異なる事項をあげてきたが、マリーナが他の港湾と異なるのは、なんといつても、付属施設が、船荷や漁獲物といった“物”のためでなく、“人”のために設けられていることである。クラブハウスやレストラン、バー、体育館、さらに最近ではマンションなどが、マリーナの一部として設けられ、いわば、海洋性リゾートの“都心”地区にな

る傾向が、ますます顕著である。現存するマリーナの経営資料などをみても、ボート部門からの収入は、経費の一部をまかなうのにも不十分であることが多く、また、たとえハーバー部門を完全公営ということで採算を無視できたとしても、利用者の利便とか、一般市民（ノンボーティング・パブリック）へのサービスという点から考えても、これら付属施設を充実させることは、計画の初期の段階から考慮されるべきである。これらの施設は、ハーバー全体をよく展望できて、陸からも、ピアからもアクセスの便がよいところがえられるのが普通で、またそれは当然でもあるが、ハーバー部門を拡大する必要が生じたとき、往々にして、これら施設の存在が障害になることがある。できれば、これらの施設のレイアウトをきめるにあたっては、将来考え得る拡張、改良計画についても検討して、将来に悔を残さないようなプランを採用することが望ましい。

1975年春、世界ではじめての海洋特別博覧会が、沖縄の西海岸にオープンする。センター広場、美しいサンゴ礁の海と、沖に点在する島々を見おろす海辺のスロープから、広場は、海にうかぶフロート・ステージへと伸びる。もちろん、広場へは、海から、水中翼船で、ホーバークラフトで、あるいは筏で、直接のりこむこともできる。フロート・ステージはマルチプルユニットのモザイクで、あるときは蓮の葉のように寄り集って、大輪の花のようににぎやかなミュージカル・レビューを支え、あるときは、くもの子をちらすように広場のコーナーに散って、ローカル色ゆたかな民族舞踊のマルチステージプレゼンテーションを展開してみせる。ライトは海底よりとばかりに、海水を通ってきた5色のレイのからみ合いが、水面におどる。その間から妖しい姿をみせたのは人魚の水着モデルだろうか、レビューは、どうやらステージの上だけではないのだ、そう思って、水中用オペラグラスをかけ、ひざをついて水中をのぞきこむと、これは、また何と美しいながめであろうか。さんごの間をすりぬけるように泳ぐ熱帯魚が、水中オーケストラのリズムにのって、夢と幻の世界を展開させてみせている。大きく走り去る影、ドルフィンはや馳けか。会場を覆う透明なプラスチックのドーム、ステージのアンカリング、大きくはないが、砕けるときにドームに不快な震動を与える磯波と振動する流れとのバランス等々、これを実現するために、テストにテストを重ねてきたのが夢のようにおもいだされる。会場から会場へと動きまわる水中スクーターや、さんごの絶壁を探検させてくれる海中シースルーエレベーター等々、数々の技術的ノベリティーが、週余の休日を南の海に遊ぶ世界の旅人たちの心をとりにする。

楽しい期待である。そのころには、もっと身近なところでも、つぎつぎと、大規模な海洋性リゾートのプロジェクトが、実現の端緒につき、また、さらに、漸新なデザインの新しいプロジェクトが、あいついで発表されているだろう。でも、一方では、漁場を失った漁民の船が浜辺で朽ち、不要となった塩田の干潟で、ゲンゴロウが水たまりを求めてさまよっているという風景もあちこちに見られるかもしれない。

リゾートの開発は、われわれに発想の転換を求めている。工業用地の原単位を、ただ公園用地の原単位におきかえただけでは、この転換は、スタートにつくことさえもできない。「われわれは、レジャー装置や施設が、人間の情緒を犠牲にした仮の拠点ばかりをつくっているのではなく、あくまで真正面から人間にむかっていくものであることを忘れてはいけない。いきなり自然を破壊して大衆化をはかることはスラム化をはかること………3つのE（Earth, Environment, Ecology）を満足させるものが前提となり、その中心である人間の情緒と肉体に寄与するものでなければならない」（浜野安弘、三つのEこそ前提）という言葉には、大いに耳を傾ける価値があるのではなかろうか。